

盧溝橋事件と第二次上海事變

——支那事變の發端についての考察——

21世紀日亞協會 會長

伊原 吉之助

今後の豫定：單發の書評と、昭和史の講義（獨立テーマで繋ぐ）を混ぜて行きます

- 1) 1月14日 新伊原塾 48 (大阪)：昭和史IV：海軍軍縮と五一五事件：英米との協調と對立……
(辯護士會館) 北浜 林 新・堀川恵子『狼の義：新犬養木堂傳』(KADOKAWA, 2019.3.23) 1900圓+税
古島一雄『一老政治家の回想』(中央公論社、昭和26.5.5/44.6.25再版) 550圓
田中健之『昭和維新：日本改造を目指した“草莽”たちの軌跡』(學研プラス、2016.3.8) 2800圓+税
- 2) 2月18日 新伊原塾 49 (大阪)：昭和史V：世界大不況からの脱出競争とブロック經濟の試練
(辯護士會館) 北浜 池田美智子『對日經濟封鎖：日本を追ひ詰めた12年間』(日經新聞社、1992.3.25) 1748圓+税
- 3) 3月18日 新伊原塾 50 (大阪)：昭和史VI：大量生産への道：我國の總力戰對應努力(一)
(辯護士會館) 北浜 竹村民郎『戦争とフォーティズム：戦間期日本の政治・經濟・社會・文化』(藤原書店、2022.6.10) 4800圓+税
- 4) 4月18日 新伊原塾 51 (大阪)：昭和史VII：二二六事件：昭和維新成らず
明治維新 → 第二維新 → 大正維新 → 昭和維新(二・二六事件で維新運動消滅)
堀 眞清『二・二六事件を読み直す』(みず書房、2021.2.26) 3600圓+税
田中健之『昭和維新：日本改造を目指した“草莽”たちの軌跡』(學研プラス、2016.3.8) 2800圓+税
谷田 勇『實録・日本陸軍の派閥抗争』(川喜多コーポレーション、2002.8.15) 4600圓+税
- 5) 5月 日 新伊原塾 52 (大阪)：昭和史VIII：我國の總力戰對應努力(二)
片山杜英『未完のファシズム：「持たざる國」日本の運命』(新潮選書、2012.5.25/2013.1.15 8刷)
- 6) 6月 日 新伊原塾 53 (大阪)：書評：兵頭二十八『地政學は殺傷力のある武器である』(徳間書店、2016.2.29)

このほか、わくわくするやうな興味深い新刊書が續々出てゐますので、どんどん取上げて行きます。
請ふ御期待！

I. 時事問題からの設問：

- (1) 北京新指導部に對する民衆の挑戦、各地で起きる → 指導部、ゼロコロナ策を緩和

發端：11月24日 ウルチの高層マンションで火事。コロナ封鎖のため脱出できず、焼死「10名」(實はもっと多数) → これに對する民衆の抗議活動があつといふ間に全國に擴散。

理由 (1) ゼロコロナ策による封鎖への一大反撥。(2) 經濟問題：企業倒産ラッシュ(今年上半期、企業倒産 46萬件)。(3) 「習近平問題」 → 25日晚、ウルチ市内で數萬人の市民は 市政府本館を包圍し、抗議活動 → 26日『人民日報』は一面トップで習近平關連ニュースを掲載。「習主席はソモン鵲の地震災害に對し、ソモン總督に慰問電報を送る」と。多數國民が焼死させられたことに一言も發していなかつた習近平が、外國の地震災害(人的被害なし)に慰問電を打った → 「不満」爆發へ：26日深夜から未明にかけて上海市内の烏魯木齊路に若者を中心に多くの市民が集り、ウルチ惨事の被害者を弔ふことから抗議行動が始り、その中で「習近平退陣」

「共産黨退陣」といつた驚天動地のスローガンが叫ばれた。→ 27日午前、ウルムチ市政府が記者会見を開き、28日から段階的に市内の封鎖を解除し、公共交通機関を再開し、市民生活を通常に戻す方針を決めたと発表。25日晩に市政府を包圍したウルムチ市民の抗議活動は政府当局の「封鎖解除宣言」に繋がったと思はれるが、「市民が抗議行動を起こせば政府が譲歩する」先例が出来たことは、多くの中国国民への大きな鼓舞となり、「反封じ込め」運動の擴りに拍車をかけた。

→ 27日から28日未明にかけて、上海に續いて北京・成都・西安・深圳など全國18都市と79の大學で抗議行動が行われた。抗議運動は国民的運動として擴る様相を呈した。→ ウルムチ惨事、ウルムチ抗議行動、習近平「慰問電」、ウルムチ政府の敗退など、様々な出来事が連続的に起きた結果、「天安門事件」以來の最大規模の群衆的「叛亂運動」が遂に勃發した。

(2) 石平 緊急特番「習近平退陣、共産黨退陣」と叫ぶ「白紙の亂」が勃發：二つの方向性

①一つの方向性：運動が「国民的な反封じ込め運動」として展開。全國で二万ヶ所以上の區域・住宅團地が「高リスクエリア」に指定されている現状下でこの儘では、封鎖解除を求める運動、或は團結して封鎖を突破されるやうな運動が廣範圍に展開されると予想できる。「コロナ封鎖」を解除させて普通の生活を取戻す運動は、大半の国民の切實な願ひを代辯し、且つ政治的リスクはより低く、具体的な目標を設定し易いため、國民一般の支持と参加が得易い。

②もう一つの方向性：運動は習近平權の打倒、自由民主の獲得といふ政治的目標の達成に向つて政治運動・政治革命として展開して行く。その際、運動は激しい叛亂よりも温和な形の「白紙の亂」、或は「白色革命」として持續的に展開して行きさう。

③27日の清華大學構内で一人の女子學生がA4の「白紙」を掲げて抗議活動を行つたのを契機に、白紙を手にして抗議の意思表示とする風潮が普及し、「白紙」は今や反獨裁・反習近平のシンボルになりつつある。白紙を靜かに掲げる行爲に對して當局は取締りにくく、鎮壓しにくい。2000年頃から中歐などで起きた「カラー革命」を彷彿させる。運動は既に單純な「封鎖解除を求める」域を超えて、習近平自身と共産黨の「退陣」を求める運動へと發展した以上、習近平と共産黨政權の性質からすれば譲歩できぬ面もあつて、近く徹底鎮壓に出る危険性は十分にある。

④封鎖解除を求める群衆は、田漢作詞の國歌「義勇軍進行曲」を巧みに利用して公安に對抗：

起來！不願做奴隸的人們！把我們的血肉，築成我們新的長城！中華民族到了，最危險的時候，每個人被迫着發出最後的吼聲。起來！起來！起來！我們萬衆一心，冒着敵人的砲火前進！冒着敵人的砲火前進！前進！前進！進！

高田三九三譯詞：起て、奴隸となるな。血と肉もて築かん、良き國。我等が危機迫り來ぬ。今こそ戰ふ秋は來ぬ。起て、起て、起て、心合せ敵に當らん。進め、敵に當らん。進め、進め、進めよ

(3) 台灣の九合一選舉／縣市長選舉（11月26日）の議席・得票の變化（『聯合報』11.27, 1面）：

	2018年	→	2022年
得票：國民黨	48.79% 610萬2406票	→	50.03% 570萬1977票
民進黨	39.16% 489萬7431票	→	41.62% 474萬3468票
その他	12.05% 150萬7036票	→	8.35% 95萬1717票
議席：國民黨	15席	→	13席
民進黨	6席	→	5席
無黨籍	1席	→	2席
民衆黨	—	→	1席

(4) 支那事變の三期区分：中華民國は袁世凱歿後、終始一貫 軍閥割拠 の内亂状態

①シナの基本的事実：シは過大・雑多で治まらぬ所。それを纏めるには強権策しかない……

民主化不能（地方分権の経験なし） 今後も無理……

唯一の好機：辛亥革命時の各省の獨立宣言

支那本部 China proper を守つて「聯邦共和國」になれば何とか纏まれた筈……

毛澤東が核戦争時代に備へて人口を急増させたのが致命的失策 → 資源（水・食糧）の食ひ潰し……

目下、「農地不足」「水不足」で世界中へ人口ばら捲き作戦を実施中（「一帯一路」政策）

中共政権の對外政策：世界乗っ取り。世界をシナの“天下”にすること

②支那事變の三期区分：

第一期：盧溝橋事件勃發～武漢・廣東作戦の終了時期まで

第二期：それ以後、對峙段階に入った 1939~41年末まで

第三期：大東亞戦争期：日本陸軍主力は中國大陸に張りつきたまま……

→ 今回取上げるのは支那事變の發端：(1) 盧溝橋事件 → (2) 第二次上海事變

II. 盧溝橋事件：

(1) 中華民國と蔣介石の北伐（中國國民黨政権の全國統一運動）の経緯概説：

①辛亥革命で清朝 → 中華民國：

袁世凱：初代大總統 → 帝政 → 帝政取消し → 急死 → 以後、子分らの軍閥割拠政治（亂世）

孫文が廣東に政権を樹立 → 南北政権並立と共に各地で軍閥濫立 → 内亂状態續く……

②孫文の中國國民黨をソ聯が支援 → 國共合作 I（北伐内戦） → 蔣介石が反共クーター → 國共分裂

1927. 4. 12 上海で蔣介石の反共クーター

1928. 5. 3 齊南惨案：居留民保護で派兵した日本軍（II山東出兵）と北伐軍が衝突、死傷者出る

蔣介石、「國恥」と肝に銘じ、「雪恥」を心に誓ふ（『蔣介石秘録(8)』40頁）

③蔣介石の「安内攘外」策：(1) 内臓の病 中共 の驅逐 → (2) 皮膚病 日本 と戦ふ

31. 7. 23 蔣介石、「告全國同胞書」發表：「安内攘外」策を提示

日本と戦ふには、有力外國（獨蘇英米）の支援協力を得る……

④ドイツ軍事顧問團の招聘：蔣介石の反共クーターで ソ聯の支援（軍事資金）がなくなった事態の代案

目的：(1) 中共殲滅（圍剿）への支援、(2) 對日作戦の支援（32. 1. の I 上海事變 で日本軍叩きを支援……）

1927. Max Bauer大佐 → Wilhelm Kriebel中佐 → Georg Wetzel大將 → 1933. Hans von Seeckt大將 → 1934. 4.

~1938. 7. Alexander von Falkenhausen大將（初め ゼークトの代理。直ぐ正式の團長となる。1910~14 に 東京駐在武官。蔣介石 との 會話は 日本語）

ドイツの對日政策の二重構造：第二帝國の軍人は日本を憎惡。日本が I 大戦で聯合國側に與してドイツと戦ひ、青島利権や太平洋の属領を得たから。だから 駐華軍事顧問團は ナチス成立後は ナチスの對日政策と食ひ違ひ、ヒトラーの歸國命令に最後の最後まで抵抗してシナに留り、蔣介石の抗日政策に協力し續けた。ヒトラーが命令通り歸國しないとドイツのお前らの資産を全部没収すると脅したので澁々歸國した

⑤1930. 剿共戦開始：1930. 12. I 圍剿（包圍討伐戦）失敗、1931. 5. II 圍剿 失敗、7. III 圍剿 → 滿洲事變 勃發 で 中止。IV 圍剿

I 上海事變 勃發 で 中止。1933. 10. V 圍剿、成功。→ 1934. 10. 中共軍、西遷へ → 1935. 8. コミンテルン第七回大會開催

反ファシズム人民戦線戦術 採用 → 1936. 12. 蔣介石、張學良を督戦中、西安事件 發生、蔣介石の剿共 挫折……

(2) 蔣介石の對日戦略構想：外國の力を借りての對日政策（單獨では對抗不能）

cf. 拙稿「大東亞戦争と支那事變」(現代アジア研究會編『世紀末から見た大東亞戦争』原書房、1991. 12. 18) 第一部 第一章

蒋介石は「II大戦」近しと予想：資料三つ——

①1928. 12. 10 國民黨中央黨部で講話「北伐成功後最緊要的工作」で見通しを語る：

II大戦が15年を出 伊 ずして勃發する。それ以前に「國防上の措置を確定し、他の牽制を受けぬようにすれば、中國は滅亡せぬばかりか、この好機に乗じて完全獨立を達成できる」(角田順「解題」日本國際政治學會 太平洋戦争原因研究部編『太平洋戦争への道(4)』朝日新聞社、昭和38. 1. 15, 424頁)

②1934. 3. 18 の 蒋介石講話。各省高級行政人員を接見した時の講演「今後の政治改革路線」(『先總統 蔣公全集(一)』台北、中國文化大學出版部、1984, 820頁)

この講話で蒋介石は、1936年(昭和11年)に II大戦が起きさうだといふ。日本の危機だからだ。根據は、

- (1) 海軍軍縮條約 が 1935年に 期限切れ となり、英米が軍擴に乘出す
- (2) 日本の國際聯盟脱退で 一切の權利・義務が 終る。當然、日本海軍の基地・南洋群島も返還され、日本海軍は 太平洋の基地を喪ふ
- (3) 1935年に 米海軍の大型巡洋艦建造計劃 が 完成し、日本海軍 を 引き離す
- (4) この年に英國 の シンガポール要塞化工事 が 完成し、日本に睨みを利かす
- (5) ソ聯はII五ヶ年計畫(1933~37年)で 軍擴中である。ソ聯は I五ヶ年計劃同様、1~2年 早く 超過達成しよう。従つて日本は 1936年に 危機を迎へる

かくて列強が日本を追詰め、1937年までに II大戦を勃發させる、と 蒋介石は 予測し、中國復興の好機と 賦

「II大戦とは 諸君よくご存じのやうに中國を争ふものであり、中國問題の解決を圖るものである。中國について言へば、II大戦は、亡國の時期であると共に、復興の好機でもある。この期に及んで我々が自國保全能力を持たねば『俎上の魚』となり、亡國の外あるまい。従つて、我國我が民族の運命は、長くともこの三年内に決する。この三年間に、我々が艱難辛苦・危機に耐へ、力を盡して復興の基礎を築くことに成功すれば、我々は危ふきを轉じて安きとなし、弱きを轉じて強きとなすことができよう」

③1934. 7. 24 に 行つた廬山士官訓練團に對する講演「外侮の防禦と民族の復興」(同上、875頁)

「日本は、世界各國を相手にして決戦する能力を持たぬ限り東亞を制壓できず、太平洋問題も解決できない。……問題は各國共同の殖民地だから、日本が中國を獨占するつもりなら、世界の征服が先決となる。日本に世界を征服する力はないので、中國を滅ぼすことも、東亞を制することもできない。現在、日本人には軍事力があり、中國を侵略する能力も、列強の一國と戦ふ能力もあるが、列強に勝ち、世界を制する力はない。……

「私はここで諸君に斷言する。日本は列強を制する力がないから中國を併吞できず、東亞も制壓できない、と。……

「軍事力では日本は強く、三日以内に我が中國の沿江沿海地方を全部占領できよう。更に重慶や成都までやつて來れよう。そこで、現代國家の軍事作戦遂行能力を殆ど持たぬ中國が、今、起ち上がるのは自殺行爲である。だが自分の見る所、日本の目標は中國ではなく、陸軍はソ聯を、海軍は英米を目標にしてゐる。日本は何れ、失敗すること確實な大戦争を惹起するものと予想される。その時こそ、我が民族復興の最後の機會である」

④蒋介石の日本輕視：

蒋介石は、1935年/昭和10年8月12日に起きた永田軍務局長斬殺事件や、1936年/昭和11年 の 二二六事件を見て、日本陸軍は 内部抗争で 瓦解 と思ひ込んだらしい。二二六事件の半年後に起きた綏遠事件(1936. 11. 23、百靈廟事件ともいふ)も、傅作義軍が破つたのは内蒙軍でなく、關東軍だと信じた(董顯光『蒋介石』195頁)。宋哲元も 關東軍與し易しと考へ、武力で通州を恢復して殷汝耕の冀東防共自治政府を倒さうと企圖して

石友三・張壁らに計画を立てさせてゐる。石・張らがためらつてゐる間に日本側が警備を強化し、通州攻撃計画は未遂に終つた（李雲漢『宋哲元與七七抗戰』叢、懋文學出版社、1973.9.15, 180頁）。

國民政府軍の日本軍輕視が、支那駐屯軍に對する輕侮行動を頻發させた。

(3) 蔣介石の安内策：

①剿共：ドイツ軍事顧問團の支援を得て、中共政權を北方に驅逐。上記(1)－④参照

效果(一)：圍剿成功、中共を北方に追ひやる → 滿洲の張學良軍を督戰して中共消滅へ……

ミンテリの横槍が入り、西安事變を経てⅡ國共合作へ……

效果(二)：日本軍叩きのための國軍育成。特に上海で クルク と トカ で 鐵壁の防禦陣地を構築

Ⅰ上海事變…… Ⅱ上海事變…… (このⅡ上海事變が眞の日支衝突の始り)

②國內建設：容共北伐 → 反共圍剿 (安内攘外) → 「建設の十年」(新生活運動) → 西安事變で抗日へ

③新生活運動：支那流 國民形成 Nation-Building / 蔣介石の文化革命

34. 2. 19 南昌行營で對中共の圍剿作戰と並行して“新支那”建設のための「新生活運動」提唱

動機＝中共を瑞金の中央ヴェトから追放した後の國民黨の思想工作

目的＝生活革命・文化革命による近代國民の創造：民族を復興し、文化を増進し、新國家支那の繁榮と強大を致すため、支那人一人一人の生活様式を一新して根底から再建する運動。國民の食衣住行を改善して禮儀廉恥に合致せしめること

成果＝都市の青年層に對してかなりの成果を擧げた……

(4) 蔣介石の攘外策：ドイツ軍事顧問團を招請して國軍強化を着々と實施 / ソ聯と結び、米國と連携

①在支米人宣教師の抜き難い“親中反日”感情と、米國でのその流布：

バーバラ W. タクマン『失敗したアメリカの中國政策：ビルマ戦線のスティルウェル』（朝日新聞社、1996.3.5） 3500頁（税込）

(1) 48-49頁 アメリカの中國浸透：ビジネスと福音の二股かて行はれてゐた……

中國の廣大さが宣教の衝動を刺戟した。中國民衆が改宗したら、中國は世界のキリスト教國、然も英語を話す未來の國になるとの希望を與へたのである。宣教師達は、中國人が自分らに相應しいと考へる社會的・倫理的構造を無視し、個人を神聖視し、民主的原則が支配的な考へ方に——さういつた考へが中國の生活様式に適合するかどうかには拘らず——變るやう求めた。19世紀の中國の苦悶を實地に見てゐる宣教師が、これを證據に中國は自ら治められない、この解決には外國の支援が必要と考へたのも無理はない。「アメリカは東洋を助ける」、米人宣教師はこれを自分らの任務とし、故國の教團への報告で繰返しこのことを訴へた。宣教師は財政援助を個人的に故國の教區に頼つてゐたので、この目的が意義あるものだと説得せねばならなかつた。全米の信徒會が、歸國した宣教師が幻灯も使つて中國民衆の優れた素質と將來のキリスト教徒の膨大な予備軍について説明するのを聞いた。アメリカの門戸開放政策により中國の領土が保全されたといふ一般の印象と宣教師の宣傳とから、被保護者としての中國のイメージ、更にそれに伴ふ慈善の對象に對する義務感のやうなものが生じた。

(2) 51-52頁 セドワールズガルト大統領は……1908年、義和團の亂の對米賠償金の未拂分を免除、これを在米中國人學生の教育費に當てた。この見え透いたチェスターの宣傳効果は抜群で、その後長くアメリカと中國人が、兩國の特別の關係の印として引合に出したものである。

(3) 117頁 國民黨の興隆は中國にゐたアメリカ人とはかゝる外國人間に激しい論争を捲起した。中國に殖民地的見解を持つてゐた條約港社會と、自分らの生残りのために中國の權利を代辯した宣教師らである。傳道團はこの頃が絶頂で、プロテスタントの宣教師 8000人、布教所 1147ヶ所、そのほかにその約半數のカトリックがゐた。中國人の敵意を免れるには、宣教師連は自

分らの立場を保護するため、條約港システムとは絶縁せねばならなかつた。彼らはリベラルな外國新聞の援の下に、中國の自決權を支持し、中國の主張は「我々が獨立時に戦つたのと同じ問題」だと主張した。國民黨はクリスチャンの孫文に淵源を發するから純粹に進歩的勢力であり、必ずや最終には内亂を終らせ、中國に良い政治を齎すに違ひない、と宣教師連は確信してゐた。彼らはビジネスや外交官らのシカカな見方を厳しく非難し、自分の所の掲示板や教會に手紙を張出し、新聞雑誌への寄稿、講演旅行や公共の集會などで中國の權利を説いた。

彼らの意見は當然、支持基盤であつたアメリカの強大な教團組織から大反響があつた。會員二千餘人の「キリストの教會」聯邦評議會は、強力な中國ロビーとなつて、米國政府に不平等條約の廢棄を請願した。

- (4) 215-216頁 中國の戦ひがアメリカに強い印象を興へた。中國の抵抗に対する同情または事業投資の關心から、新聞記者、宣教師その他のオブザーバー達は良い面だけを見て、缺點や失敗には一切觸れなかつた。理想化されたイメージが罷り通つた。蔣介石總統と夫人は『タイム』の紙の1937年の「今年の夫婦」となつて、悲壯な高貴さを漂はせて、アメリカ人を凝視した。いかにも嚴肅で毅然、勇敢で眞實であるかみえた。『タイム』の發行者ヘンリー・ルースは宣教師を嚮として中國で生れた。彼の蔣一族に対する崇拜的な見方は偶然ではない。宣教師たち、その後の北米外國布教團會議、米國の聯邦キリスト教會評議會、YMCA、中國飢饉救濟委員會が一致協力して、彼らの被後見人（中國）の大義を、精力的に、その強大な影響力の全てを擧げて、熱烈に支持してゐた。一世に亘つて布教活動を續けた結果、アメリカ人は他の國には感じない責任を中國に感ずるやうになつてゐた。宣教師連が中國にインパクトを興へたかどうかは別にして、「彼らが米國にインパクトを興へたことは確かだ」と或るヨーロッパ人オブザーバーが指摘してゐる。彼らが蔣介石夫妻を飽くまで支持したのは利己的動機に出たことで、キリスト教徒の蔣夫妻が中國のトップにあるといふことは、布教活動の成功の、願つてもない證據になるからである。彼らは蔣介石を持上げ過ぎた。そして一旦彼を完璧なものにしてしまつた以上、これにキチをつける言動は全て許し難いことと見るやうになつた。「中國は今や史上最も開明的な愛國者であり、最も有能な指導者連を持つに到つた」と『ミヨナリ・レヴュー・オブ・ザ・ワールド』は報じた。

同紙はまた中共をも、「全ての進歩的な人々の願望と矛盾しない社會改革」の實現に努力してゐる集團と、穩かな表現で紹介してゐる。この「同じ目的の内に團結してゐる」とのイメージが、中國救濟基金集めに狂奔してゐた教會關係團體のみならず、アメリカの借款と介入を求めて壓力を強化してゐた國民黨政府の使節と宣傳員にとって憂だつた。中國社會の中の深い亀裂を認めるのは具合が悪かつた。そのため、共產主義者を和解できぬ相手とみるのは拙い、同じ仲間内の尊敬すべき社會改革者、といふことにしたのである。國民黨は特派員達に、中共を共產主義者と稱ばないでくれと頼んだ。蔣介石は1939年にドイツ新聞記者に、「中國に共產主義者は一人も残つてゐない」と訓した。全ての人がこの幻想を盛立てた。中共もその仲間だつたのは、統一戰線といふ黨路線に叶つたからである。……

國際ファシズムの擡頭がアメリカの中國觀と、その中核をなす熱烈な三段論法を形成した。即ち民主主義が侵略國に脅かされてゐる。中國が一侵略國の攻撃を受けてゐる、故に中國は民主國であり、その戦ひは世界民主主義の戦ひであるといふのである。……

一黨獨裁と檢閲と青幫と秘密警察の國民黨にも、ドグマに凝り固まり、革命的社會主義の目標をひたすら追求する延安にも、民主主義は芽生えてなどゐなかつた……

- (4) 271頁 アメリカは中國をアホドリやうに首にかけてゐた——山東、實行されない九ヶ國條約の保障、無力なスティムソン・ドクトリン、對日屑鐵賣却、アメリカの「特別な」關係、義和團事件賠償金の返還、最後の強い中國理論、みんなアメリカが背負ひ込んだ荷物である。それは罪の意識、保護者意識、幻想から出てゐた。……

- (5) 286頁 FDRは、……中國には義務を感じてゐた。

世論では中國は同盟國の中で最も人氣があつた。FDRが1月6日の議會へのメッセージで、米國と共に戰爭を戦つた同盟國の名を擧げ、「中國の勇敢なる人民」に觸れた時、最も自發的な、最も大きな拍手が起きた。

②各國の支那支援 略年表：

31. 在中宣教師の娘 パール・バックの『大地』（第一部）出版：21ヶ月に亘るベストセラーに。30ヶ國語に譯され、長期に及ぶ世界的ベストセラーに。

32. ピューリッツ賞 授賞。37. 映画化 (MGM)。38. ノーベル文學賞 授賞
33. 11. 17 FDR政權、就任の年に ソ聯を承認：米ソ提携の“左派連携”開始……
36. 長老派宣教師の息子 ハンリー R. ルース の TIME が 週刊グラフ雑誌 LIFE 創刊。親中反日 の 立場 で 反日宣傳 開始
37. 8. 21 中ソ不可侵條約 調印：武器援助・パイロット附 空軍支援
37. 10. 5 FDR, 「隔離演説」 A Quarantine of Agressor Nations Speech：シゴで 日獨伊三國 を「強盜國家」 “the three bandit nations” として 非難
37. 12. 12 上海で「パナイ號事件」發生。→ あはや日米開戦へ……? 海軍の陳謝・賠償で危機回避
38. 2. 7 中ソ軍事航空協定 調印：軍用機・技術者・操縦士の提供
38. 12. 15 米中間に トラック・ガリンと 桐油 の バター借款 (2500萬) 調印
39. 3. 8 英國、中國と法幣安定借款 (1000萬ポンド) 協定 調印
39. 3. 米國、中國と軍用機・發動機購入用 1500萬借款 契約 調印
39. 6. 13 ソ聯、對中借款 (1億5000萬) 協定 調印
39. 11. 3 FDR, 中立法修正案に署名：武器禁輸を撤廢
40. 12. 29 FDR爐邊談話「米國が民主國の兵器廠となる」
41. 3. 11 FDR, 武器貸與法 に 署名
41. 7. 25 重慶で 米英中の軍事合作協議 (~7. 26)：ビルマルート防衛などを協議
41. 12. 8 米英、對日宣戰布告

(5) 盧溝橋事件：頻發してゐた偶發事件のひとつ

- ① 前史(1)：綏遠事件 (百靈廟事件)：1936年10月~ 關東軍が支援する内蒙軍が綏遠侵入、國民黨側の傅作義軍が反撃して要點の百靈廟を占領。支那側はこれを「支那軍が精銳關東軍を破つた」と宣傳して士氣大いに上がる

前史(2)：1936年12月12日 西安事件發生。蔣介石が中共と通じた張學良に監禁され、抗日戰爭を誓約させられた事件。蔣介石は「安内攘外」策を修正させられた

- ② 發端：7月7日、日本軍一個中隊が夜間演習中に 十數發の實彈が撃ち込まれた……

79頁 盧溝橋最初の不法發砲の犯人は 第29軍37師210旅219團第三營所屬の正規支那兵

82頁 29軍には蔣介石直系の藍衣社員が入り込み、その監視の眼が光つてゐた

83頁 「事變ノ主役ハ天津駐在藍衣社第四總隊ニシテ……」(「北平特務機關業務日誌」)

この種の偶發事件は珍しくなかつた……だから忽ち (7月11日) 現地で停戦問題が成つた……

問題：日本側では近衛内閣が 7月11日、華北の邦人保護・治安維持のための派兵を決定、各界に舉國一致の協力を要請。我國は、居留民保護のためには、支那駐屯軍の兵力が過少であつた……

【各國の駐屯兵力と居留民數】(12頁)

	居留民	駐屯兵力	割合 (%)
英	1000	1000	100
米	1000	1300	130
佛	700	1750	250
伊	150	390	260
日	13800	2100	15 → 居留民保護のためには派兵が不可欠だつた……

- 29頁 最初の發砲の犯人：「第二十九軍三十七師百十旅二百十九團第三營に屬する支那兵」……

日本：對ソ優先派 (石原莞爾少將ら) と「一撃派」(「1ヶ月で片づく」と奉答した杉山陸相ら) とが對立

支那側では 蔣介石らがドイツ軍事顧問團の指導により、日本軍を挑発して開戦を期してゐた……

∴紛争止まず：支那側は、藍衣社を通じて日本軍を挑発し続けた……

石原莞爾參謀本部作戰部長が近衛首相に提言：南京に飛び、蔣介石と談合して片付けて欲しい……

近衛首相は、杉山陸相の諒解を得て宮崎龍介を使者に選んだが、陸軍の一撃派から妨害されて事成らず

40頁 7月11日 (日) 五相會議 (近衛首相・廣田外相・杉山陸相・米内海相・賀屋藏相)：五個師團 (差当りは三個師團) 派兵を決定

42頁 支那軍の協定不履行続く……

7月10日 (土) 約百名の支那軍が衙門口に現れ、迫撃砲を射撃しつつ龍王廟に迫る → 白兵戦……

7月11日 (日) 停戦協定 調印

7月13日 (火) 日本軍砲兵聯隊修理班がトラックで移動中、三十八師の支那兵が手榴弾 → 日本兵4名戦死

7月14日 (水) 支那側の不法銃撃で日本軍に死傷者発生……中間地帯で便衣の支那人数名が爆竹……

7月18日 29戰 宋哲元、香月副官を調し、平和維持を申し入れ／日本軍偵察機、中央軍の陣地を確認

7月19日 蔣介石、廬山聲明：11日の停戦協定を真向から否認

7月20日 午後、宛平縣城から撤退した筈の支那兵、我が第一線目掛けて一斉射撃

7月21日 三十七師の撤退開始日：秦徳純・馮治安の妨害により支那兵、撤退せず

52頁 「得体の知れぬ銃聲」の正體：便衣の青年約10名が中間の部落に入り込み、土砲と爆竹を鳴らまくつてゐた
彼らの正體：清華大學の學生を中心に、中共の指導下、日支兩軍の中間で兩軍を挑発してゐた
采配を振つてゐたのは 中共全國總工會書記・中共北方局主任の劉少奇ら

57頁 7月22日 現地情勢、再び悪化／支那軍參謀次長熊斌が南京から北平に来て連日冀察首腦と談話……
熊斌北上の目的：宋哲元を抗日戦に踏み切らせること

58頁 7月23日 事件發生後、北平に増派された三十七師二百十八團 永定河以西に撤退。
従前から北平に駐屯したる劉自珍の百十一旅は依然城内に留り、撤退の準備などしてゐない
盧溝橋事件を惹起した吉星文の二百十九團は今なほ永定河西岸の長辛店に盤踞……

60頁 中共の動靜：
7月 8日 毛澤東・朱徳のを以て「日寇華北侵攻に際して蔣委員長に致すの電」「宋哲元に致すの電」發出
中共が事件發生に密着してゐることを如實に示す文章……

11日 周恩來が廬山の國防會議に参加して蔣介石に對日開戦を迫る

61頁 → 中共は、ソ聯の指導により、日本軍を河北に於て包圍殲滅することを狙ひ、國府軍の對日衝突を裏面より必死に策動してゐた……

15日 朱徳の名で「對日抗戰を實行せよ」論文を發表

23日 毛澤東の名で斷乎抗戰方針を取るべしと呼號

63頁 支那側の仕掛け：廣安門事件及び平津掃蕩

7月25日 晩、廊坊事件 發生：廊坊驛 (北平と天津の中間驛) 附近の電線修理・鐵路保護のため天津から派遣された電信隊1個中隊が
夕刻から宿舎問題で支那側と交渉中、支那軍が同中隊を包圍し、午後11時半、輕機関銃射撃を浴びせた事件。急を聞いた天津軍司令部が取敢えず五ノ井中隊を派遣するが、同中隊も數倍の敵に囲まれ、危機に瀕した。そこで午前3時、軍司令部は總預備の鯉登聯隊を急派。三輪少佐の戰闘機隊も参加。敵はこれまで余り日本軍と紛争を起した事のない三十八師の部隊で、百十三旅長劉振三の麾下部隊二百二十六團であつた。
これまであくまで「不擴大方針」を貫いてきた天津軍司令部も、事ここに至つては、自衛の見地から二つの處置をとらざるを得なかつた。

(1) 宋哲元に對し、三十七師の撤退を促進させる

(2) 情勢の急迫に鑑み、北平城内の居留民保護を強化する

7月26日 廣安門事件：盧溝橋事件 突發以來、北平の居留民半減して凡そ2000人。保護に當る日本軍は僅か歩兵二個中隊
北平の支那軍は三個旅といふ多數／その頃既に居留民が支那兵に亂暴される事件が頻出

午後2時、廣部大隊、豊台驛 到着。26台のトラックに分乗。櫻井顧問は午後3時50分、川村機関員を帯同して廣安門 到着。顔なじみの三十七師三十七師 王連長 と 會ひ、廣安門 の 開門 を 依頼。王連長 は 劉自珍旅長 と 電話 で 許可を要請。許可。開門。

所が廣部大隊が廣安門に着いた時は廣安門は閉まつてゐた。王連長が劉旅長と電話してゐた時、それを立ち聴きする白色便衣の青年あり。その策動で秦市長が門を開めよと王連長に厳命したのである。

櫻井顧問 → 寺平補佐官 → 秦徳純・陳覺生 に 廣安門 の 開扉 を 要求。廣安門西方 1000 呎 の 場所で 開門交渉 の 結果 を 待ち佇びてゐた 廣部大隊 は 午後7時、開門 の 報 に接して 出發。先頭車・二番目 の 車 が入り、三番目 の 車輛 が 入ろうとした時、東樓門の南側 50 呎 の 城壁上 から 激しい銃声が響く。間髪を入れず、城壁上 の あちこちから 機關銃・小銃 が 日本軍目掛けて 一齊に 火蓋を切つた。トラック隊 は 應戦しつつ、12台まで 通過。廣部大隊 は 城門内外で 完全に 二分された。

午後8時、廣部大隊 は 城の内側から 廣安門 の 敵 に 向つて 攻撃。城外では 新たな支那軍 が 入り損ねた日本軍を 攻撃。

日本の選擇：ここで 全面攻撃 に 持込むかどうか。松井機関長 の 意見。全面攻撃案 に 反對

68頁

- (1) この戦闘をこの儘擴大したら 市街戦になり、戰術的に拙劣。揉み消した方がよい
- (2) 北平城内 二千 の 居留民 は 市内各所に散在。本格的戦闘に入れば 随所に 邦人に對する 略奪・殺戮 が 始るだらう
- (3) 戦闘擴大は 150萬 民衆 を 兵火に捲込み、古都 の 文化 を 破壊するに至る
- (4) 廣安門事件 は 局地解決し、居留民 の 引上げ を 完了し次第、改めて 攻撃 を 發動する。戰場には 北平城外を選ぶべきである

午後8時過ぎ、冀察政務委員會 代表 として 交通委員長 陳覺生 が 特務機關 を 訪れて 廣安門事件 収拾案 を 齎した

日本側 の 案：城内に入った 日本軍 は 全部 公使館區域 の 警備隊内に 收容する。城外 に 残つた部隊 は 全部 引上げる

70頁

27日 午前2時20分 廣部大隊 が 無事 東交民巷 の 北平警備隊 兵營 に 到着／午前6時、日本大使館 は 邦人引上げ命令 正午までに 98% を 收容
28日 午前0時 軍司令部 は 27日附けで 宋哲元 宛 開戦 を 通告

II. 第二次上海事變とドイツ軍事顧問團：支那側が仕掛けた本格的な日本軍破壊の戦ひ

以下、拙稿「獨支年表」より

1937. 7. 7~ 盧溝橋事件發生後、蔣介石、張治中上將を京滬警備司令に任命。張治中は命令受領後、直ちに所管部隊を保安隊に變装させ、上海虹橋飛行場等に進駐さす。

→ドイツ軍事顧問團 の 對日戰爭獎勵（『ドイツと戰爭』378頁）：日本軍と飽くまで戦ひ抜く抗戰決意こそが對日戰爭勝利の鍵と、ファルケンハウゼンは 蔣介石や 蔣介石が主席である 國民政府軍事委員會に訴へ、日本と中華民國の全面戦闘へと盧溝橋事件が發展するや、各地の最前線に危険を侵して顧問團員を派遣し、作戦の助言をさせ、ファルケンハウゼン自身 上海の激戦地に何日も張りついて對日戦闘の指揮を助け、中華民國の將兵を勵ました。

1937. 7. 19 蔣介石、廬山會議に於て「最後の關頭」演説（井本熊男『作戰日誌で綴る支那事變』芙蓉書房、昭和53. 6. 30, 100-101頁に要旨掲載）：①中國の犠牲の最後の段階は刻一刻と近附きつつある。我等は中國の主權を犯す者に對し、斷じて一步も讓歩せぬ。日支全面戰爭も已を得ない。假令弱國なりとは言へ、不幸にして最後の關頭に到つたならば、我々の爲すべきことは唯一つ、則ち全國民の精力の最後の一滴までも傾倒して國家存立のため抗爭するのみ。②盧溝橋の事件は、何等豫め計劃されたものでないと想像する者があるかも知れぬが、既に一ヶ月前から、日本の新聞と幾多の外交機關の言明に徴するも、何等かの事件が起る兆候が看取できた。この事實よりして、日本が我々に對して極めて判然とした態度を包藏してゐるので、和平は容易に維持し得ぬことを悟らねばならない。③東北四省を喪失してよりここに 6年、この間塘沽協定あり、次いで今や争點は盧溝橋事件に於て正に北平の城内に達した。萬一北平が第二の奉天になつたならば、南京が第二の北平になることを如何にして阻止できようか。④若し相手が地位を換へて我等の地位に立つて東亞和平の維持を主眼となし、日支兩國民を戰爭の渦中に捲込み、相互に永遠の仇敵となることを望まぬならば、右四條件が考慮せらるべき最小限度の條件であることを認めるであらう……

(日本に對して反省を促してゐるやうにも見える……)

芦田均は『外交史』に、右 4 條件を以下の如く列擧してゐる。

- (1) 如何なる解決案も中國領土の保全と主權を侵害することを許さない。
- (2) 冀察政務委員會の地位は中央政府の決定する所、如何なる非合法的變更も許さない。
- (3) 冀察政務委員長の如き中央政府の任命した地方長官が外國の壓迫で罷免せられてはならない。
- (4) 第29軍の現在の駐屯地に對して外力が如何なる制限を加へることも認めない。

1937. 7. 20 獨外務次官 マッケン：「ドイツ政府は極東の紛争に於て、嚴正な中立を守る意向である。我々は事態の進展を大いなる憂慮を以て追跡してをり、極東に於る我々の經濟的利益のため、更に我々の反コミンテルン政策に鑑みて、事變の早期平和解決を眞劍に望んでゐる」

1937. 7. 下旬 Falkenhausen中將、保定の北支戰區司令部へ

1937. 7. 25 晚 廊坊事件發生 (山岡貞次郎『支那變遷：その秘められた史實』原書房、昭和50. 8. 15, 63頁以下)：北平—天津の間にある廊坊驛附近の電線修理・鐵道保護の任務を帶びて天津から派遣された日本軍電信隊一個中隊が夕刻から宿舎問題で支那側と交渉中、支那軍が同中隊を包圍し、23:30 機關銃射撃を浴びせて來た事件。

廊坊事件 (井『日誌・支那變遷』103頁)：我が通信隊が、天津と北平の略中間、鐵道に沿ふ郎坊で、通信線の補修をしてゐるのに對し、第38師の部隊から射撃を受けた事件。この事件は全く偶發的に起つたのであつたが、射撃した支那軍が日本に最も好意を持つてゐると見られていた張自忠の第38師の部隊であつたことも、この事件の意義を一層重大視する因となつた。これで表面稍落着いてゐるかに見えた情勢が一舉に緊張し、日支全面衝突の發火作用を成した。

1937. 7. 26 廣安門事件發生 (山岡『支那變遷』64頁～)：日本軍が北平の居留民保護のため廣安門から北平に入らうとして門内に閉込められ、城壁上から機關銃で亂射された事件。日本軍は前進部隊と後續部隊に分斷された。

廣安門事件 (井『日誌・支那變遷』103-104頁)：

1. 我部隊が北平の廣安門を通過中、支那軍隊が廣安門の樓上から小銃・機關銃を以て射撃を加へた。明らかに挑戦である。
2. 支那駐屯軍司令官は、平津一帶の支那軍を攻撃してこれを掃蕩するに決し、翌27日行動を開始する如く處置した。この日香月軍司令官は宋哲元に對し、期限付撤兵の最後通牒を突付けた。／
3. 中央部は右の決心を認可し、左の處置をした。
 - (1) 支那駐屯軍司令官に、右行動に關し命令を與へた。
 - (2) 内地部隊の動員・派遣を決定した。

→對支庸懲一擊論の擴大勢力が中央・現地の大部を占めて大河の如き流れを作り、石原莞爾第一部長を主とする不擴大論の少數勢力は押流されてしまつた。

1937. 7. 28 日本政府、揚子江沿岸在留邦人 2萬9230名に引揚を訓令／上海では 8月6日 租界への退避を指示 (『支那變遷陸軍作戰<1>』257頁)：海軍第11戰隊掩護の下、8月9日までに上海引揚を終了。南支各地の居留民 1萬1650名も 8月28日までに引揚終る。南京に殘留してゐた日高參事官以下の外務官憲も 8月16日 南京發、列車で 18日、青島に安着

1937. 7. 28 獨外務省幹部 ヴァイツェッカー：「シテでの行動を反共の戰ひとして防共協定で正當化しようとする日本の態度は邪道」「日本の行動は寧ろ防共協定と矛盾してゐると見做される。なほ日本はシテ統一を妨げ、シテの共產化を促し、結局はシテをロイヤルの手の内に追込むからである」

1937. 7. 29 通州事件：通州で冀東政權保安隊叛亂し、日本人180人 殺害

1937. 7. 30 張治中、南京國民政府 (蔣介石) に意見具申 (張治中「揭開八一三淞滬抗戰的序幕」『八一三淞滬抗戰』17頁／『日中戰爭の軍事的展開』慶應義塾大學出版會 101頁)：一旦上海に異常事態が発生したら「主導權を掌握するため先制攻撃を發動すべし」と。

→蒋介石の返電＝「先制攻撃の態勢を作つて置け。發動時期は命令を待て」

1937. 7. 31 通州事件視察記（東京裁判：通州事件に関する日本軍人の証言 ②通州救援第二聯隊歩兵隊長代理 桂 鎮雄 陸軍少佐／国立國會圖書館法廷證番號 2499：桂 鎮雄 宣誓供述書／辯護側文章番號1139 極東國際軍事裁判（1947）p. 172／国立国会図書館憲政資料室所藏マイクロフィルム）。

私は元陸軍少佐で現在千葉県夷隅郡千町村字能実に住んでおります。私は 1937年7月（1937年）の際、救援の為通州に派遣せられた第二聯隊の砲兵砲中隊長代理を致しておりました。通州に 7月31日 02:30到着し現地の掃討に従事し通州に於ける日本人居留民の虐殺の跡を見ましたので左に之を陳述致します。尚当時撮影した写真は提出しておりませぬ。

一、私は 7月31日 08:00頃、旅館錦水樓に参りました。錦水樓の門に至るや、變り果てた家の姿を見て驚くと共に屍体より發する臭氣に思はず嫌な氣持になりました。玄関の扉も家の中の障子も家具も取り毀され門の前から家の奥まで見透すことが出来ました。入口に於て錦水樓の女將らしき人の屍體を見ました。入口より廊下に入るすぐの所で足を入口の方に向け殆ど裸で上向きに寝て顔だけに新聞紙が掛けてありました。本人は相當に抵抗したらしく、身體の着物は寝た上で剥がされた様に見え、上半身も下半身も暴露しあちこちに銃劍で突き刺したあとが四つ五つあった様に記憶します、これが致命傷であつたでせう。陰部は刃物でえぐられたらしく血痕が散亂して居ました。帳場や配膳室の如きは足の踏み場もない程散亂し掠奪の跡をまざまざ見せつけられました。廊下の右側の女中部屋に女中らしき日本婦人の四つの屍體があるを見ました。全部藻掻いて死んだ様でしたが銃殺の故か屍體は比較的綺麗であつて唯、折り重つて死んで居りましたが一名だけは局部を露出し上向きになつて死んで居ました。室内の散亂は足の踏み場もない程でありました。次に帳場配膳室に入りました、ここに男一人、女二人が横倒れとなり或はうつぶし或は上向いて死んでおりこの屍體は強姦せられたか否かは判りませんが鬪つた跡は明瞭で男は目玉をくりぬかれ上半身は蜂の巣の様でありました。女二人は何れも背部から銃劍をつきさされた跡が歴然と残って居りました。次に廊下へ入りました。階下座敷に女の屍體二つ、これは殆ど身に何もつけずに素っ裸で殺され局部始め各部分に刺突の跡を見ました。次に二階に於て四五人の屍體を發見、これは比較的綺麗に死んでおり布團をかぶせてありました。唯脚や頸や手が露出しておるのを見ましたが布團をはがす氣にはなれませんでした。池に二三人の屍體が浮んで居るのを望見しましたが側へ行つて見る餘裕はありませんでした。

二、市内某カフェーに於て、

私は、一年前に行ったことのあるカフェーへ行きました。扉を開けて中へ入りましたが部室は散亂しておらずこれは何でもなかつたかと思ひつつ進んだ時、一つのボックスの中に、素っ裸の女の屍體がありました。これは縄で絞殺せられておりました。カフェーの裏に日本人の家がありそこに二人の親子が惨殺されて居りました。子供は手の指を揃へて切斷されて居りました。

三、路上の屍体

南城門の近くに一日本人の商店がありその主人らしきものが引っぱり出されて、殺された屍體が路上に放置されてありました。これは胸腹の骨が露出し内臓が散亂して居りました。

1937. 8. 4 第三艦隊司令長官長谷川清中將、情勢逼迫に鑑み、特別陸戦隊を隱密裡に逐次上海に派遣するや要請（『支那事變陸軍作戰〈1〉』257頁）：軍令部は慎重で、今暫く情勢を見てから考慮すると回答。

1937. 8. 7 午前、米内海相、杉山陸相に「政府ハ青島・上海居留民ノ生命財産擁護ノ爲 陸軍兵力ヲ所要ニ應シ直ニ急派シ得ルノ準備ヲナスコト」を閣議に請議するや申入れた。しかしこのため閣議は 實施されず。

1937. 8. 8 第三艦隊司令長官長谷川清中將、中央の指示に基づき、事態擴大に應ずる一切の準備を整へるため、新たな兵力部署を行ふ（『支那事變陸軍作戰〈1〉』258頁）。

1937. 8. 9 18:30 頃、上海海軍特別陸戦隊西部派遣隊長大山勇夫海軍中尉（同日附大尉）・齋藤與藏一等水兵が支那保安隊のため、虹口飛行場（上海西方 8km）附近の路上で射殺さる（戦史叢書『支那事變陸軍作戦<1>』朝雲出版社、昭和50/1975. 7. 25, 258頁）。10日、實地検証の結果、支那側の不法行為が明かとなる（支那側認めず）。
1937. 8. 10 米内海相、閣議で上海居留民保護のための陸軍部隊の動員派兵準備を要請（259頁）
杉山陸相に石原莞爾參謀本部第一部長、陸軍の派兵は北支に留め、上海・青島は海軍委任を主張
しかし 7. 11 の「北支事變ニ關スル陸海軍協定」に 陸軍部隊の派兵を約束済 → 小兵力に留めて派兵へ
1937. 8. 11 上海駐在沖野亦男海軍少佐が 中國淞滬警備司令楊虎と折衝：要領を得ず
「8. 11夜、蒋介石命令張治中將在常熟・江湖・蘇州・無錫的第87・88・36 三个師及重炮兵兩個團推進到上海。」（『淞滬會戰』北京、中國文史出版社、2010. 9., 67頁）
→「この間 蒋介石は、ドイツ顧問團に 作戰指導を受け、優れたドイツ製武器で武装した87師・88師・税警團など最精鋭部隊10萬を上海戦線に投入し、日本の侵略への強い抵抗意志を示した。上海での戦闘は、さながら「日獨戦争」の様相を呈した」（田嶋信雄『ナチス・ドイツと 中國國民政府 1933-1937』東大出版會、2013. 3. 19, 357頁）
1937. 8. 11 張治中軍、夜半に 蘇州 出發、「12日的清早就占領了上海」（『張治中回憶錄（上下）』北京、文史資料出版社、1985. 2. 121頁）
1937. 8. 12 フロムベルク＝孔祥熙 會談：「フロムベルク將軍は、總統から禁止されぬ限り、シナとの 交易を貫徹するため、あらゆる努力をすると語つた。在華ドイツ軍事顧問團の引揚は問題にならない」
「開戦後、數週間も経たぬうちに、日本はドイツに對し、シナへの軍需物資供給と顧問團の存在に關して抗議を申入れた」（『日中戦争の諸相』303頁）
「ドイツの 軍事顧問團が設立し教育した中國軍は、この當時 30萬の兵力を備へてゐた。軍事顧問の活躍ぶりは、特に上海防衛戦での成果となつて現れ、日本軍を驚かせた。ファルクセンが 數日間 激戦の續く上海に滞在し自ら作戰を指導したことは、駐日ドイツ大使 フェルクセンも知つてゐた」（同上、304頁）
フェルクセン Herbert von Dirksen 自身の回想——（同上、304頁）
「ドイツ政府からの トラウトマン宛の指示にも拘らず、民間人として シナ の 友人を見捨てるやうなことはできぬ」といふ點で 我々の意見は一致してゐた。従つて私は 必要と思はれる所には全て軍事顧問を送込んだが、それは 往々にして 前線であつた」
1937. 8. 12 英米佛伊四國大使：上海に戦禍を及ぼさぬよう日本に 共同通告（「無防備都市」化の要求）
日本政府は 同日 川越大使を通じて 中國側が停戦協定を守るなら 我方は戦闘行動せずと通告
「しかしこの間、中國側は着々 戦備を進め、日シ兩軍の對峙は益々尖鋭化」（261頁）
「12日、中國軍は 中央直系軍 3萬、其他 2萬に達したが、對する 海軍陸戦隊は總兵力 5千未滿」
1937. 8. 13 夕方、シナ軍の攻撃開始：II 上海事變、勃發【8. 13-22 海軍陸戦隊の戦】
8. 13 10:30頃 商務印書館附近の中國軍が陸戦隊陣地に突如射撃。間もなく鎮靜。しかし 同日夕 八字橋附近の中國軍が砲撃開始。彼我交戦状態へ（262頁）
張治中、拂曉に 攻撃予定：南京の蒋介石、命令「不得進攻」（張治中 122頁）
（曰く、皆さん この戦役を「八一三」戦役といふが 正式開戦は 8. 14 15:00 ですと。同上 122頁）
8. 14 日本海軍、10:00頃 支那飛行機十數機の空爆を受けて 本格作戰開始（262頁）
張治中軍、上午 空軍、黄浦江の敵艦空爆。15:00 總攻撃命令、16:00 砲撃開始。
以後 22日まで 虹口・楊樹浦 の 敵（日本海軍）根據地を 猛攻（張治中 123頁）
「帝國政府聲明」出兵目的三つ：(1)我カ居留民ノ保護。(2)今次事變ノ如キ不祥事發生ノ根因ヲ芟除。(3)日滿支三國間ノ融和提携ノ實ヲ擧ケントスルノ外他意ナシ（263頁）
- 【8. 23-】 名古屋第三師團・四國善通寺第十一師團の戦：
3ヶ月で 4萬1000餘人の 死傷者を出す 大激戦（cf. 旅順戦 4ヶ月半で 6萬の 死傷）
→ドイツ軍事顧問團の對日戦争獎勵（『ドイツと 戦争』378頁）：日本軍と飽くまで戦ひ抜く抗戦決意こそが

對日戦争勝利の鍵と、ファルケンハウゼンは 蔣介石 や 蔣介石 が 主である 國民政府軍事委員會に訴へ、日本と中華民國の全面戦闘へと盧溝橋事件が発展するや、各地の最前線に危険を侵して顧問団員を派遣し、作戦の助言をさせ、ファルケンハウゼン自身 上海 の 劇地に 何日も張りついて 對日戦闘の指揮を助け、中華民國の將兵を勵ました

→ドイツ軍事顧問團の上海事變指揮（『ドイツと戦争』378頁）：上海での戦いで日本軍は内地からの陸軍の大規模動員にも拘らず、クレークとトーチカを巧みに組合せたドイツ顧問團の指導による中國側の防衛線に阻まれて大損害を出し、10月一杯まで一帯に釘付けにされた。そして翌1938年には江蘇省徐州近くの山東省台兒莊附近で日本軍は一連の戦闘で中國側に殲滅されかける。中國側を鼓舞する狙ひもあつてか、この戦闘についてファルケンハウゼンは 蔣介石に「この戦争で初めての殲滅戦で、創設以來の日本軍の大敗北」との知らせを送った。この事態を受けて日本軍は徐州附近の中華民國軍の大集團を逆に包圍し、撃滅して事變に決着をつけようと徐州會戦を發令するが、中華民國軍の大集團は大損害を出しつつ大包围から脱出した。上海での戦ひばかりか、台兒莊でも徐州會戦でも陣頭にドイツ軍事顧問團員がゐたことが窺える。ファルケンハウゼンはドイツ本國への報告で「ドイツの二、三個師團もあれば簡単に、さう時間をかけずに日本軍を中國から追い拂へると思ふ。これは誇張ではない」と記してゐる。

1937. 8. 16 ヒラー、外相 Konstantin von Neurath に 指示：「日本との提携は維持する。しかし 現在の日支紛争でドイツの 中 立 を 保持せねばならない。シナとの協定に基づいて輸出される 提供品については、シナから外國爲替 ないし 原料供給で支拂はれる限り續行せよ。但し その場合も、可能な限り對外的な隠蔽工作をせよ」

→獨支貿易（同上 306頁）：獨支貿易は 獨日貿易より遙かに重要かつ大規模。蔣政權とは理想的共存關係が 成立していた。製品を輸出し、工業原料（特に タングステン と 錫）を輸入。∴産業界・國防軍は關係斷絶に反對。獨→支の兵器契約供給金額＝2300萬マルク（1936）→ 8200萬マルク（1937）

1937. 9. 22 中國に抗日民族統一戦線、結成：國共合作

1937. 10. 5 FDR「隔離演説」：シガで日獨を侵略國と非難し、傳染病同様隔離が必要と説く

→ドリス・カーズ・グッドウィン（砂村榮利子/山下淑美譯）『フランクリン・ローズヴェルト(上)：日米開戦への道』中央公論社、2014. 8. 10, 29頁）：演説は、集團安全保障を重視する介入主義者には歓迎された。しかし報道関係者が、それを外交政策の大轉換と稱んで衝撃を露はにし、孤立主義を奉ずる聯邦議會議員らが大統領彈劾をほのめかしたので、ローズヴェルトはその主張を撤回したのだつた。「先頭に立つて進もうとしてゐるのに、振返つてみると誰もついてきてゐないなんて、酷い話だ」（Samuel I. Rosenman, Working with Roosevelt, 1952. p. 67）と彼は顧問のサム・ローゼンマンに ぼやいた。彼はその時、一度に一歩づつ歩を進めること、もつと現實に即した世界觀を徐々に國民の中に浸透させて行くこと、有權者を置き去りにして先走りした ウッドロー・ウィルソンの愚を繰返まいと心に決めたのだ。だがそれは容易なことではなかつた。

1937. 11. 2 廣田外相、Herbert von Dirksen 獨駐日大使に對支和平條件を傳達

→11. 5, トラウトマン駐華大使が 蔣介石 に 通告

1937. 11. 5 第10軍、杭州灣北岸に上陸、上海戦線の背後を衝く。

→火野葦平の 話を 小林秀雄が 記した物：「火野君の 戦記に依ると」日本軍を 撃退した「嘉善附近の敵トーチカの 数は、杭州入城後の戦跡視察によると、コンクリート のもの 103, 堆土のもの 400, 支那全線に互って希有な数だったそうだが、それを 4日間で 強引に突破した」

1937. 11. 9 Falkenhausen中將、蔣介石・孔祥熙らと 和平について談合

1937. 12. 13 南京陥落：「日本は和平條件を一層厳しくしてきた」「ファルケンハウゼンはシナは 今後半年抗戦できる、南京陥落は軍事面より政治上の意味をもつものだ」と 結論した。だが トラウトマン・東京の ティルクセン・ドイツ外務省とも この見方は 樂觀的すぎると考へ、揃つて今のうちに日本の和平條件を受入れて戦争を終結させよとファルケンハウゼンに迫ったが、うまく行かなかつた」（同上、305頁）

1937. 12. 末 Falkenhausen中將、再びシナ側と和平につき談合

1938. 1. 16 近衛内閣、トラウトマン大使を通じ 蔣政権に和平交渉打切を傳へ、「爾後 國民政府ヲ 對手トセス」と聲明
1938. 2. Joachim von Ribbentrop (1893-1946), 政變により、外相に就任：對日關係を重視し、中華民國から軍事顧問團を撤収させた（獨の東アジア政策、變）
→リベントロップ、ファルケンハウゼンに 何度も激しく顧問團引揚げを要求（『ドイツと 戦争』380頁）：ファルケンハウゼン及び軍事顧問團員が 頑強に拒み続けたことが、ドイツ外務省の記録から窺える。中華民國でのドイツ軍事顧問團の活動はドイツ政府と無関係の私的契約であることを指しファルケンハウゼンはこの「命令」を受入れようとせず。ヒトラー側が、軍事顧問團員の「ドイツ国籍 剥奪・資産押収」などで迫ってやつと顧問團が歸國を決意した。
1938. 2. 7 シナ・蘇聯軍事航空協定 調印：ソ聯、シナに 軍用機・技術者・操縦士の提供を約束
1938. 3. 23 臺兒莊の戦ひ：支那側が「勝ち戦」と大々的に宣傳
→ドイツ軍事顧問團の臺兒莊戦指揮（『ドイツと 戦争』378頁）：江蘇省徐州近くの山東省台兒莊附近で日本軍は一連の戦闘で中國側に殲滅されかける。中國側を鼓舞する狙ひもあつてか、この戦闘についてファルケンハウゼンは蔣介石に「この戦争で初めての殲滅戦で、創設以來の日本軍の大敗北」との知らせを送った。この事態を受けて日本軍は徐州附近の中華民國軍の大集團を逆に包圍し、撃滅して事變に決着をつけようと徐州會戦を發令するが、中華民國軍の大集團は大損害を出しつつ大包圍から脱出した。上海での戦ひばかりか、台兒莊でも徐州會戦でも陣頭にドイツ軍事顧問團員がゐたことが窺える。ファルケンハウゼンはドイツ相への報告で「ドイツの二、三個師團もあれば簡単に、さう時間をかけずに日本軍を中國から追い拂へると思ふ。これは誇張ではない」と記してゐる。
1938. 春 ドイツ軍事顧問團員數=46人（『ドイツと 戦争』380頁）
1938. 4. 22 Ribbentrop外相、軍事顧問團 引揚げを決定
1938. 5. 17 リベントロップから 在漢口ドイツ大使へ（『ドイツと 戦争』381頁）：①軍事顧問團を 少く引揚げるとは問題外である。②略 ③問題の軍事顧問團の即刻の歸還は（ヒトラー）總統の明白な指示である。顧問團は直ちに中華民國からの退去を求められてゐる。④この電文を受領したら、中華民國政府に軍事顧問契約の解約を直ちに強く促すよう要請する。契約の解約を中華民國政府が濫る場合は、貴大使職の維持が困難になることを、個人的になら勘づかせて差支へない。軍事顧問團員が當該指示に従はぬ場合、深刻な結果が自らに生ずることを明確にしておかれたし。
1938. 5. 20 Oskar Trautmann大使、軍事顧問團の顧問契約解除を正式申入れ
1938. 5. 21 在漢口ドイツ大使から 外務省へ（『ドイツと 戦争』381頁）：まだ全員にではないが、軍事顧問團員は當該決定に関して教示されており、報道關係が喧しくなる危険がある。大元帥（蔣介石）の歸着が何時かも不確かなのでこれ以上は待てず、外交部長に對し大元帥に（訓令を）傳へるよう求めた。（ドイツ政府の）この決定に外交部長は驚愕状態である……。
1938. 6. 13 リベントロップから 在漢口ドイツ大使へ（『ドイツと 戦争』382頁）：①軍事顧問團の これ以上の出發延期は當地からの指示の精神に完全に抵觸する。總統御自身も至急の出發を望んでられる。②フォン・ファルケンハウゼン將軍 または 個々の顧問團要員が難題を持出してゐるといふのであれば、當該者に對して政府は効果ある手段に訴へざるを得なくなる。フォン・ファルケンハウゼン將軍の 駐在武官任命は問題にならない。③蔣介石大元帥が顧問團の解任になほ反對ならば、貴下の即時召還となることを元帥に傳へられたし。
1938. 6. 19 在漢口ドイツ大使から 外務省へ（『ドイツと 戦争』382頁）：殘務處理のため顧問團員 5,6人になほ残つて欲しいと蔣介石が固執してゐることを、病氣の外交部長の命により 外交部副部長が 聯絡してきた。それに拘ることは當職の即時召還に繋がると蔣介石に傳へるやう御指示通り話した……。外交部副部長は（大元帥への）傳達を約したが、中華民國を他の大國に接近させてしまふやうなドイツ政府の遣り方に遺憾の意を表明した……。
1938. 6. 20 リベントロップから 在漢口ドイツ大使へ（『ドイツと 戦争』382頁）：①略 ②いまだに 軍事顧問中止の訓令が 齎されてゐなければ至急それを行ひ、中華民國政府の意思に逆らうとも可能な限り早く同國を退去するよう全てのドイツ軍事顧問團員に 期待する。現在の居所からの出立と中華民國領域からの退去の日附を當方に打電されたし……。

③ 總統からの指示である前記の②を期待に背いて顧問團員が履行せぬ場合は、ドイツ國家への忠誠を明白に破つたことになり、ドイツ國籍の取消・資産押収の措置が取られることになる……。④ 略

1938. 6. 27 蔣介石、Falkenhausen中將に別れを告げる

1938. 6. 28 Oskar Trautmann大使、召喚

1938. 7. 2 獨人軍事顧問送別會 (NY 2日發同盟『東京朝日』7. 4 / 『ドイツ史と戦争』374頁) : NY に 達した UP漢口電報によればフォン・ファルケンハウゼン將軍以下 ドイツ人軍事顧問 20名 に對し、蔣介石 は 2日 これら軍事顧問のため 漢口に於て盛大な送別午餐會を開催その勞を謝したといはれる。

1938. 7. 5 ドイツ軍事顧問團、香港へ向け漢口を出發

1938. 8. 1 米誌 LIFE に 見開き 2頁 の 記事「ドイツ軍事顧問團 支那を去る 今後 蔣介石は 1人で 戦ふことになる」(阿羅、14-16頁) : 「中國軍を訓練してきた ファルケンハウゼン將軍以下 29人の ドイツ軍事顧問團 が 引揚げるようになった。1年間に亙る日本の引揚げ要求にドイツが 同意したあと、蔣介石は 2ヶ月 實行 を 延ばした。7. 4 の 最高作戦會議 に ファルケンハウゼン將軍 の 姿 なし。こんなことは 初めて。ドイツ軍事顧問團に代り、今後 蔣介石 が 中國軍 を 指導することになる」

ファルケンハウゼン談「最後に シア が 勝つ と 確信している。シア は どこまでも戦ひ續けられる。シア軍は 素晴らしい」

→ 支那事變を泥沼化した ドイツ軍事顧問團 (『ドイツ史と戦争』380頁) : ドイツ軍事顧問團 と 蔣介石は、軍事力としては中華民國に比べ問題なく強力だった日本軍の「一撃」を、優れた作戦と抗戦意志によつて凌ぎ、逆に日本を疲弊させ、國際的に孤立させ、總敗戦への道に追込んだ。ファルケンハウゼンら ドイツ軍事顧問團員 が 日本との戦闘に際して どんな作戦を立て、日本軍と どのように切結んだか、それぞれの 戦術の巧拙を具体的に 分析することは、軍事記録が乏しく、踏込んだ記述はできないが、ドイツ軍事顧問團に鍛えられた蔣介石側に 日本も日本軍も 翻弄されたのが日中関係であつたことは、何より 蔣介石軍を 當初の豫想に反して撃滅できず、日本の對英米宣戦まで蔣介石側を持久させてしまつた事實により 裏付けられる。

1938. 10. 「Reichenau將軍が歸國した。ヒトラー は 立腹し、將軍達は政治を全然理解してゐないと罵つた。ライヒェナウ は、ヒトラーの對日構想を全て台無しにはうとしてゐる (ライヒェナウ は 皆と同じように シア病に罹つて歸國した)。陸軍はヒトラー にとって 國家の中で最も不安定な要素である。外務省や司法部よりなほ悪い」

1940. 7. 5 ファルケンハウゼン から 蔣介石への手紙 (『ドイツ史と戦争』379頁) : 「極東での大闘争が始つて三周年に 閣下に 小生の願ひを率直に申し上げます。閣下もご存じの如く小生は衷心より常に國家と國民、國家の偉大な指導者に良かれと思ひ、今もそれは變つてゐません。この間に全世界は大變動に晒されました。しかし私は國家と國民が、掛替へのない尊敬すべき指導者の下でこの大變動を勝抜いて行くであらうことを前にも増して確信してやみません」